Tanya Leighton

Artist Interview 2

ドキュメンタリーとしての絵画

Esteban Jefferson エステバン・ジェファーソン

ニューヨークを拠点に活動する1989年生まれのエステバン・ジェファーソンは、美術館を訪れた際に撮影した自身の写真やヴィデオ映像をもとに、人種、アイデンティティ、ポスト植民地主義や歴史の扱い方などの問題を中心に絵画を制作している。制度の在り方を問う絵画の実践について話を聞いた。

ニューヨーク・クイーンズ区にある作家スタジオの屋上にて　Photo by Dean Majid　Courtesy of the artist and Tanya Leighton, Berlin

絵画が映し出す現実世界

新進気鋭のアーティストのニューヨーク最古のオルタナティヴ・スペース、ホワイト・コラムズで個展がビュー し、今秋にはベルリンのギャラリー、タニヤ・レイトンでの展示を控えるエステバン・ジェファーソン。過去2年にわたり取り組んでいるのは、グールベやレンブラント、モネなど、主に19～20世紀の西洋美術を展示するパリの美術館「プティ・パレ」のシリーズだ。自作をドキュメンタリー、またはジャーナリズムと表現するジェファーソンは、「もしも私の絵が奇妙に見えるのなら、それは私たちの世界が奇妙だからです」と言う。不可解な雰囲気を纏いながらも、見る者を引き込むその絵画世界が「現実」であるとすれば、そこにはいったい何が描かれているのだろう。

「プティ・パレで展示されているのは、人々の期待通りのものです。美術館のチケットデスクの後ろに常設展示されている、アフリカを主題とする2つの大きな大理石の胸像を除いては、その胸像たちは、ヴィデオスクリーンや受付デスク、標識、来館者のための仕切りと同じように、制度上の雑然とした環境に置かれています。これらの胸像について、壁にはその人物名も、作者名も、さらには制作年すらキャプションがないのです。それらはただ「Buste, Afrique（アフリカ人男性の胸像）」と「Buste, Afrique（アフリカ人女性の胸像）」として識別されています。しかし私がリサーチしたところ、おそらくヴェネチアでつくられたものだとわかりました。

絵画全体の雰囲気をつくるピンクと淡い褐色は、プティ・パレのロビーを覆う実際の大理石の色から来ています。この絵画作品においては、空間全体と胸像の差異を強調していますが、これこそが、美術館に実際に存在する力学であり、絵画はドキュメンタリーだと私が考えるゆえんです」

本プロジェクトの長期的な目標は、美術館との対話をオープンにしながら、この胸像たちの提示方法を再考し、完全にリサーチしたうえで壁のキャプションを更新し、それらをより中央に近いスペースに移動させることだという。皮肉なことに、ジェファーソンにとってこの胸像こそ、プティ・パレで展示されているもっとも興味深い作品なのだ。そしてまた、リサーチのためにパリで遭遇していたアパートの一室を描いたのが、《Chambre Parentale（親の部屋）》（2019）であり、このプライベートな空間も、美術館での事象とつながっていく。

「アパートは家族の友人のもので、建物のファサードの改修が行われる直前だったため、工事によるほこりから保護するために、アパート内のすべてがビニールで包まれていました。作品のなかに描かれている人形は、私がそこに滞在するずっと前にどこかへ消えた所有者の母親のものです。絵画はビニールで保護しても人形はそのままにしたという判断に、興味を持ちました。プティ・パレの胸像と同じような空間に、人形があるような気がしたのです。絵画には歴史的な価値があり、人形には個人的な価値があります。人形には複雑な歴史があり、絵画には単純なわかりやすい歴史があります。私たちの歴史、とくに不快な歴史の文化的な扱い方に強い関心を持っています。アメリカでは南北戦争を戦った南軍の記念碑について、長らく議論されています。それらを破壊して何か新しいものをつくるのか？　それらに明白な歴史的文脈を追加して、そのままにするのか？　かつて記念碑があったことを思い出させるために、撤去はしても、台座は残すのか？　プティ・パレの胸像の絵画は、これらと同じ問いに答えるものであります。それはファイン・アートの文脈においてのことです。同様に、《Chambre Parentale》は、個人的な家族という歴史の文脈から、その問いに応答するものだと思います。私は実際に本作の拡張バージョンに取り組んでおり、来春に公開される予定です」

絵画では、空間と胸像の差異を強調したが、これこそが美術館に存在する力学である。

Chambre Parentale（親の部屋）　2019
リネンに油彩　182.9×127cm
Courtesy of the artist and Tanya Leighton, Berlin

制度批判としての絵画

視覚的にも求心力のあるナラティヴと、コンセプチュアルな思索をはらむジェファーソンの絵画作品。それらは、とりわけ絵画というメディウムにより、どのような影響力を持ち、本プロジェクトの目標をいかに達成していくのだろうか。

また、新作《Flaneuse（入）》（2020）では、ゲルハルト・リヒターが娘の後ろ姿を描いた著名な絵画作品を参照している。

「リヒターの作品は、彼の灰色の絵の前に座っている美しい花柄のセーターを着た彼の娘を、後ろから描いています。彼女の目の前にある作品は、絵画として完全には表現されていませんが、それは暗示されており、観客がアート作品を見ている様子を見ているというエコー（反響）となる様子」が私はとても好きです。たまたま花柄のシャツを着ていた女性が、プティ・パレの胸像のひとつを写真に撮ったところを目撃し、後ろから彼女の写真を撮りました。プティ・パレを何度も訪れていますが、謎ありの胸像には つきりと気づいたのは、その時だけでした。リヒターの絵を直接的に参照するように個展を微調整しています。

2つの絵の相違点としては、リヒターの絵では娘が後のスタジオ作品を見ているということです。私の絵の場合、その女性はもとの大理石の空間に浮かんでいるようなオブジェを見ているのです。リヒターの娘が、その灰色の絵の意味を知りたければ、彼女は父親に尋ねることができます。しかし、私の絵のなかの女性が胸像の意味を知りたがったとしても、美術館は、それについて入手できる情報がほとんどない状況をつくり出しているのです」

人はつねづね、見たものしか見ようとせず、大きな声だけに耳を傾け、小さな声を拾おうともしないことがある。ジェファーソンの絵画には、何が描かれているのか、そして現実世界で何が起こっているのかを確かに考えさせる力がある。彼は絵画の実践にコンセプチュアルな側面を適用し、絵画として美しいだけでなく、そのイメージの外側の世界へも大きな影響を与えることに行数なく取り組んでいる。

Flaneuse（After Richter）（入（アフター・リヒター））　2020　リネンに油彩
101.6×71.1cm　Courtesy of the artist and Tanya Leighton, Berlin

プロフィール

エステバン・ジェファーソン　画家、1989年ニューヨーク生まれ。現在、同地在住。コロンビア大学美術学修士。ホワイト・コラムズ（ニューヨーク）、ハイデルベルク・ヒッツ（ドイツ）、ビルバオ（スペイン）、ベルリンのギャラリーなどで個展を開催。ニューヨークのハイ・ライン・ギャラリーなどで多くのグループ展に参加。2020年にキャサリン・ヒューズ・ニューヨーク賞を受賞。ベルリンのギャラリー、タニヤ・レイトンにて個展を開催。

Tarifs Réduits（割引料金）　2020　リネンに油彩　182.9×274.3cm
Courtesy of the artist and Tanya Leighton, Berlin

Bijutsu Techo, December 2020

Kurfürstenstraße 156, 10785 Berlin
+49 (0)30 21 972 220, info@tanyaleighton.com, www.tanyaleighton.com